

養護学校の日々

一学期の危機

一学期には、子どもも落ち着かず、不安定で、大人も子どもを理解できず、困惑のまま大変な日々が長くつづくことがある。

小さい人の髪を引張る子ども、ひたすら大人の背に負われることを求める子ども、大人に字を書かせつづける子どもなど、どの子どもも、本人としては、そうするよりほかなないように動いていた。けれども、その活動には

津 守 真

満足感がみられず、その中であって、保育の手ごたえのなさに、私はあせりを感じていた。ただ、それぞれの子どもがしよんとすることを受けとめて、一日一日を過ごすほかなかつたが、事態は容易に好転しないように思えた。

こういう時は、保育者にとって危機である。外部の目からも乱雑に見える場面も多いと思うし、保育者自身もこれでよいと思っていない。あるときは、これらの子どもは保育の対象としてはあまりに病的なのではないかと

思ったり、あるときは、環境のつくり方や、保育の方法の欠陥によるのではないかと考えたりする。こういうときに、こうしたらよくできるという公式や理論が与えられたら、それにとびついてしまうかもしれない。また、子ども自身のことよりも、保育の場の秩序をつくることの方に、エネルギーを注ぐことにもなる。しかし、根本は、子ども自身が満足して生活できるようになることであり、人間として成長することである。それを見失うことになったら、それは保育全体の危機である。

保育者は、子どもの生活の中に組みこまれてい存在なので、子どもがゆきづまり困惑していると、保育者もゆきづまってしまう。保育者が希望を失い不安定になると、子どもも困惑の度を増す。子どもと保育者とはパートナーであって、一方が下降すると他方も下降し、相互に落ちこんでしまう。子どもが落ちてゆくときには、大人もまた、立ち上れないほどになることを、私は、身のまわりの幾人もの保育者に見てきた。しかし、同時に、その最底辺から、事態が好転することも、何度も見てき

た。この一学期は、私自身、その片鱗を体験できたときであった。

保育者がゆきづまったとき、子どもと取り組みつつけながら道を見出してゆく力は、どこから生れてくるのか。第一には、どんな子どもも、かならず自分から能動的になり、自分自身の生きがいを見出し、それぞれの子どもなりに他人と相互性をもって生活できるようになると確信することである。その確信は保育者の勝手な独善ではない。保育者がそのように信じて子どもに接することは、子どもの側からいうならば、子ども自身の力が信頼されることである。内心では大人から見放されながら、形の上で大人の社会の規律に従うように強制されるのではない。どんなときにも、自分が人間として信用されていることを、子ども自身が知ることが前進への第一歩である。

第二には、一緒に保育をする人々が、互いに弱点はあっても、その人の労苦を察し、その人の認識と決断を尊重し、共に考えることである。たとえ職場の先輩であっ

ても、他の保育者が困惑しているときに、解決法を教えることはできない。まして、子どもと大人の当面している問題の内面にふれずに、外的秩序を回復することにのみ着目したのでは、真の解決にならない。それぞれの子どもの生活と人間とを育てることを根本にすえて、保育者が互いに支え合うような、保育のコミュニティをいかにして形成するかは、個々の保育者の課題であると共に、それぞれの保育施設の課題である。

第三に、子どもを人間として育てることの実践と研究を不断に追求しつづけることは、社会に共通の課題であることの認識である。個々の保育者、保育施設、家庭は、孤立してあるのではない。むかしから、世界中に、同じ努力をしている人々が、有名無名を問わず、たえずいることを思い起すことができる。

現実には、保育の日日の困難があまりに大きいとき、これらのことを忘れて、自分の場合にはこれはあてはまらないと思ってしまう。しかし、どんな子どもも、人間として育つ可能性に例外はない。普通の子どもも、重度

の障害をもった子どもも、精神病的な子どもも。日日、具体的な保育の場をひとつずつ積み重ねる中で、子どもの自我が形成され、大人の自我も強められてゆく。

人形の目

前回到述べたS夫やT夫と並んで、活発に動きまわる子どもにH夫がいる。大人の手にマジックペンを持たせ、壁面に字を書かせることが一年以上も続いている。

そのH夫に、一学期の四月の末から、違う種類の行動がさしはさまれるようになった。

H夫は、そのとき手があいていた私の手をひいて、遊戯室の隅にゆき、「ネンネ ネンネ」と云って私を押し倒し、床にねかせた。H夫が私にこのようにして近寄ってきたのは初めてなので、私はうれしく思いながら横になった。それから、私のわきに人形を並べた。ぬいぐるみの人形、プラスチックの人形、大きい人形、小さい人形などを、口でチュとキスしてから下におく。私も、その人形のひとつにキスすると、いそいで来て、その人

形をとり床におく。こうして二十くらい、人形を並べた。こうしているときには、いつも気ぜわしく要求する字を書かせる行動に固執することもない。落着いてゆっくりして、私もゆっくりした気持で、H夫としばらくの時を過した。

H夫が私を床にねかして、人形をそのわきに並べたとき、私も人形のひとつになったような気がし、人形も私と同列の存在であるように思えた。H夫の目にも、人形と私の区別はなかったのではないかと思う。人形を人間として見ているのか、私を人形として見ているのか。ふだん他人と、親しんで遊ぶことの見られないこの子どもは、人形という媒介物を通して、人と接しはじめたのだらうと思う。子どもは、人形に対して、したしみや嫉妬を向ける。人形は、子どもの感情をうけるが、否定的な意志をもった反応をしない。子どもは、実際の人間に対するよりも、人形に対してもっと安心して接することができる。

一学期の四月の末、私は、子どもたちが遊ぶ状態にな

らず、少しも変化が見られないように思えて、少なからず暗い気分になっていた。この日、私は、この子どもたち、遊びによって自己実現するようというより、たとえひとときでも、それぞれの子どもなりに快くたのしんで過せる時がもてたらと願いつつ保育の場に臨んでいた。H夫に手をひかれて床にねかされたとき、私はその時を子どもとたのしみたいと思っていたし、H夫も、人形と同じように快さを受けとめてくれる人間を見出し、いたのかもしれない。

こうして過したあとは、全体に満足な気分なのだろう。H夫は、別の部屋でおもちゃ箱の間に坐りこみ、気に入った物を手にとっては投げて、ひとりで過していた。けれども、その時間は長くはつづかない。じきに、いつものように、大人に字を書かせることをはじめる。まだ遊びとは云えないような単純な行動であるが、ひとりで落着いて過す時間があるようになったことは、H夫の生活の著しい変化である。

それから一週間後、帰りぎわに、H夫は私の手をひ

て、ホールの一隅のぬいぐるみや人形のおいてあるところにゆき、目の開閉する人形を私の膝においた。そして、私の手にはさみをもたせ、人形の目をはさみの先で開閉させる。私のはさみを一寸でもはなすとだめで、

「はさみ はさみ」と云う。私は、最初、はさみで髪を切ることの要求かと思ひ、髪を切ろうとすると、そうではない。人形の目をはさみで開いたり閉じたりしてみることが、それもあまり満足ではない。開閉する眼瞼をはがしたいらしい。私は、その要求にはこたえかねて、「お人形さんはえらいねー。Hくんに目をいじらせてくれるんだから」と云ったりする。傍にいた男性の実習生が、「ぼくには、とてもこの相手はできない」と云う。迎えてきた母親がそばにきて、「うちでも髪を切るが大へんで、自分がいやなことを、人形にやつてるみたいです」という。

H夫は、人形の目をはさみで開いて、更にそれををはがしたい。大人の心はそれには抵抗を感じる。たとえ人形でも、可愛らしい女の子の柔い目に、金属のはさみをあ

てることには、大人の感情が許さない。大人は人形に自分の女性像を映して見ているからである。子どもが人形の目をはがすことを要求するとき、人形を物としか見ていないのだろうか。一週間前に、人形と私とを床に並べたときのことを考えると、そのときには人形に対して人間に対するのと同様のしたしみを感じていた同じ子どもが、今度は人形に物体以外のものを感じていないとは考えにくい。むしろ、人形に人間的感情を感じているからこそ、人形の目をはがそうとしているのではないだろうか。

はがすという行為には、表面に付着しているものを取り除くこと自体が目的である場合と、はがすことによつて、その奥に何があるかを探ろうとする場合とある。H夫は、以前から、セロテープやガムテープをはがすことを好む。たとえば、長椅子の表面の破れをガムテープで貼って修理すると、そのテープをはがして、中の齧^{をか}までも出さないと気がすまない。また、二年前、五才のクリスマスに、サンタクロースのお面をいちはやくはぎ取る

うとしたのもH夫であった。仮面の奥には誰か他の人の顔がかくれていることを彼は認識していた。H夫は、はがすこと自体に関心があるのではなく、貼ってあるところの向う側に何かがかくされていると思い、それを探ろうとしている。

H夫が人形の目をはがそうとするのは、動く眼瞼自体に関心があるのではなく、開閉する目の奥に何かがあるかを見ようとしている。実物の人間に同じことをしたならば、拒否的な反応に会うことをおそれて、何でも受けとめてくれる人形に、願望を実現するのである。

人形の目をはがしてその奥を見ようとするのは、大人だったならば、他人の真意を疑っているときに、化けの皮をはぐと表現されるときに似ている。H夫は、大人は何かをかくしていると思っただけではないだろうか。このことは、そのときにはまだ十分に私は認識していなかったのであるが、その後には展開された数々の活動によって、次第に明瞭になってきた。たとえば、いじられては困る物を、そっとポケットに入れたりすると、

す早く気が付いてとんでくる。また、戸棚の中の物を出して、徹底的に奥まで探す。

人形の目をはさみではぎとろうとするH夫の傍にいて、人の偽りのない本心にふれようとしてできない苛立ちのあることを感じさせられた。

次第にわかるようになる過程

五月の連休がはさまり、他のクラスの職員が病気で休んだので手伝いにゆき、その次にH夫に会ったのは、十月以上たってからであった。私がホールにいと、H夫は私の手をひききぎて裏庭にいった。樹木の皮をはぎ、マジックで木の幹に字をかいたり、私に書かせたりする。字をかかせはじめると長くつづくので、大人はそれとつきあう覚悟をきめながらも、早く終ればよいと願ってしまふ。H夫が室内に移動したときに、私は通りがかりにマジックを靴箱の上において、部屋に入った。H夫はマジックを探しはじめ、私のポケットに手をいれて探すが、見つからないので庭に走ってゆく。私はH夫にだ

まってマジックを置いてきてわることかと思ひ、靴箱の上にあることを告げ、H夫はマジックを持って部屋に入った。床に坐つて、そこにあつた絵本の絵の部分を書紙からはがしはじめる。最初は、絵を印刷した紙の後には何があるのか探索しているうちに、はがすこと自体が遊びとなつてくる。私が傍に坐つてゐると、落着いて絵本をはがすことをつづける。

こうして、マジックで字をかくことや、はがすことをつづける子どもとつき合ひながら、そのことの意味をつかみきれず、私自身の行動もときに不安定になつてしまふ。そのため、子どもにとつてだいなマジックを途中に置いてきてしまつたりする。私の側のこの不安定さが、はがす行為を助長することになつてゐるように思われるが、そのときにはそれが気がつかない。

それでも、私が傍に坐つてゐるので、H夫は、かなり長い時間落着いて、ひとりで絵本をはがすことをつづけていたのだと思ふ。私は、そこに坐してゐるうちに、自分も何かをしながらかそこにゐるのがよいだらうと考へ

た。字をかかせることと、はがすことを好むH夫だから、ビニールテープで字を作つてみようと思ひ、H夫の好む字「三和銀行」を切り、机の上に貼つた。そのときには、字をかかせることへの興味が、ビニールテープで貼ることへと転換しないだらうかと、かすかな期待があつた。しかし、それが浅薄な考へであつたことにじきに気付かされることになつた。H夫は私のテープ貼りを一寸見ていたが、それをはがし、マジックで三和銀行と書かせた。この字は、じきにはがれたり消えたりするものではだめで、永続的に刻印されていなければならぬ。だから、これまで、じきに消えるサインペンでは承知せず、消えないマジックで壁に書くことを要求したのだと思ふ。

こうした日々を積み重ねる間に、私はH夫にとつてのこれらの行為の意味を徐々に理解するようになったし、H夫もまた、私が故意に何かをかくそうとしてゐるのではないことを、次第に信用するようになってきた。そして、次の生活への変化が生れることになつたのである。